

名人セミナー

高松文三

九月八、九、十日と三日連続で、サンタフェ、ニューメキシコ州にて、宮脇和登先生の奇経治療セミナーに参加した。三日連続のセミナーというのは老体に応える。しかし、同年代に見える宮脇先生は実は私より一回り上なのだ。文句は言えない。「よくわかる奇経治療」を十五年近く前に買って、だいぶ試した記憶があるが、いつの間にやら止めてしまった。結局納得がいくだけの手応えがなかったからだろうと思う。今回は、著者のセミナーということで再挑戦する意気込みでやってきた。

セミナーの進行役はご存知の桑原浩栄先生で、宮脇先生とは旧知の仲という。そこに宮脇先生の奥さん、かおりさんが助手として加わり、その上スティーブン・ブラウンという名通訳という強力な面々で、このセミナーがうまく行かない訳がない。

初めに宮脇先生が英語で挨拶をした。ブラウン氏がいるのに敢えて英語でやるところは宮脇先生の洒落っ気だと思うが、ブラウン氏はずいぶんと感心していた。というのは、普通宮脇先生クラスの人には敢えて、不慣れな英語を聴衆の前では使わないという。大先生はわざわざ生徒の前で自分の弱みを見せないものだ。こういうところに宮脇先生の謙虚さを見たと言う。なるほどと感心しつつそういう観察が出来るブラウン氏にも感心した。

桑原先生一流の軽妙洒落な話ぶりには定評があるが、各講義の初めにおこなわれる先生による気功エクササイズも楽しめた。経絡治療にせよ奇経治療にせよ、脈診、復診は不可欠であり、治療の出来具合はひとえに指頭感覚の精度に懸かっているといってもいい。この指頭感覚を鍛えるのに気功がよいと桑原先生は言う。「単に時間稼ぎのためにやっている訳ではありません。」と先生が言っていたが確かにそうなのだろう。その他にも、やはり治療師たるもの健康で気の巡りもよい状態に保っておくというのは説明するまでもあるまい。宮脇先生にせよ、桑原先生にせよ、いつも楽しそうにしているのはきつと気の巡りがよくてそれだけでもう既に名人の域に達しているように見受けられる。桑原先生の「笑いの呼吸」は、文字通り、「楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しい」という言葉の意味がよく分かる例であった。

本題に戻ろう。初めに、桑原先生による経絡治療の講義があったが、経絡治療と奇経治療は、表裏一体だからである。敢えていえば、経絡治



療は本治法であり、奇経は標治法という言い方も出来る。

使うツボはそんなに多いわけではない。「後谿、申脈、外関、臨泣、列欠、照海、内関、公孫、通里、太鐘、合谷、陷谷」ぐらいのものである。これらをペアにして使うというだけのことだ。そのペアの決め方は、病気の現れている箇所の流注、病症、圧診点、脈診、奇経復診、テスター等様々な方法がある。この中の奇経腹診は宮脇先生が考案、開発した奇経専門の復診法である。これにより奇経治療の精度が上がったという評判である。

いつものことだが、名手がやるのを見ているといかにも簡単そうなので「これなら俺にも出来る」と思うのだが、実際やってみるとどうもそう簡単には行かない。見るのとやるのでは大違いだ。流注で決めるとしても、どの経に属するかハッキリするとは限らない。病症もしかり。奇経復診も、当たり前だが自分でやってみると結構迷う。先生が何年もかけて出来たものを、すぐその場で出来ると思う方がおかしいのは百も承知なのだが。

三日目に総復習という意味で、生徒の一人が全員の前で別の生徒を治療することになった。選ばれたのは、今回のセミナーを地元で準備した Ehrland Truitt である。治療し始めると彼の緊張感がこちらにも伝わってきた。宮脇先生が経絡治療でも奇経治療でもどちらから始めてもいいといわれ、アーランドは経絡治療から始めた。そして「肝虚」と診た。宮脇先生が次に診断し、その結果は言わずに、さらに治療を続けるよう指示する。「陰谷」「曲泉」を補した時点で、患者さんはよい変化を感じ取った、と後で聞いた。ただその時点でもまだ肩の凝りと、上腹部の不快感と、慢性的な左眼の違和感には余り変化がなかった。そこで先生が「脾虚で取ってごらん」と指示し、今度は「太白」「太陵」を補した途端、スーッと肩の突っ張りが取れたようだ。そして、その後の奇経治療では、「通里」「太衝」のペアで治療が行われ、終了した時点で、肩、上腹部、眼、すべての具合が深い部分でいい感じになったと言う。この間、確認の意味以外では患部には触っていない。



治療後、宮脇先生が「あれは難しい診断でした。間違えても当然で、私はたまたまああいうお腹の人をたくさん診ているのでわかりました。でも素晴らしい治療でした」と言ってアーランドを讃えた。盛大な拍手があって、二人が握手をし、アーランドが先生の手を握ったまま深々と頭を下げた。五尺二寸の宮脇先生が六尺二寸のアーランドより大きく見えた。と同時にアーランドのこの道に対する真摯さが、こちらに伝わってきて胸がジーンとした。なぜアーランドだったのかよくわかった。

宮脇先生は、ともすれば難しくなる内容をなるべく面白く伝えようとするサービス精神が旺盛で、よく駄洒落を飛ばす。これが、結構通訳泣かせで、さすがのスティーブン氏も時々困っている様子うかがえた。先生の場合、大阪井のひねりも利いているので余計に大変だったろうと思う。数々の日本の有名な治療家に接しているブラウン氏に質問してみた。

「本当に、あんなに少しツボがずれただけで、あんなに差が出るんですね。物凄く微妙な世界ですね。」

「首藤先生もそうですが、あの辺の先生になると、けっこう気で治してしまってる部分が多いので、本当は何が効いているのかは、判別し難いです。」

「そうですね。結局名人クラスになると何をやっても効くんですよ。」

「ええ、でも寅さんじゃないけど『それを言っちゃおしめえよ!』で、そんなことを言った日には『だから日本鍼灸はいい加減だ!』なんていわれるんですよ。」

スティーブン氏の口から寅さんのセリフが出てくるのに可笑しみを感じながらも頭の中では、弟子にもならず、セミナーにも行かずに、どうやらそういう域に達せるのだろうと、相変わらず横着なことを考えていた。

高松文三

1956年生まれ。言霊インスティテュートを1983年に卒業。2005年、ダラスのテキサス大学を卒業。ダラスで開業する。